様式１０

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲口 甲口保 乙口 乙口保 口修	第　　号	氏名	大村　智也
審査委員	主査　尾崎　和美 副査　吉村　弘 副査　片岡　宏介			

題目

Association Between the Swallowing Reflex and the Incidence of Aspiration Pneumonia in Patients With Dysphagia Admitted to Long-term Care Wards: A Prospective Cohort Study of 60 Days

（長期療養病棟入院の摂食嚥下障害患者における嚥下反射と誤嚥性肺炎の発症率との関連性：60日間の前向きコホート研究）

要旨

本研究の目的は、長期療養病棟入院の嚥下障害患者における嚥下反射の状態と誤嚥性肺炎（以下、AP）の発症との関連性を明らかにし、評価に用いる簡易嚥下誘発試験（Simple Swallowing Provocation Test 以下、SSPT）の信頼性を検証することである。

長期療養病棟入院の 65 歳以上の嚥下障害患者 39 名（男性 20 名、女性 19 名、平均年齢 83.8 歳）を対象とした。SSPT による嚥下反射の状態を要因とし、入院から 60 日以内の AP の発症率をアウトカムとした。AP の診断は、主治医が日本呼吸器学会の診断基準に　基づき行った。入院時の SSPT の結果から対象を SSPT 正常群と異常群の 2 群に分類し、AP の発症率を比較した。年齢、性別、原疾患、脳血管疾患の既往、Glasgow Coma Scale、Body Mass Index、Geriatric Nutritional Risk Index、Mann Assessment of Swallowing Ability、Food Intake Level Scale、Functional Independence Measure、Oral Health Assessment Tool を共変量として 2 群間比較を行い、多変量解析を用いて AP に関連する予測因子を抽出し SSPT の予測精度を確認した。なお、本研究は鳴門山上病院倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：1-1-01）。その結果、AP の発症率は SSPT 正常群 33.3%（6 例）、SSPT 異常群 76.2%（16 例）で有意差を認めた（p=0.002）。また、SSPT 異常群のファイ係数は 0.43、リスク比は 2.29（95%CI: 1.14-4.58）であった。さらに、ロジスティック回帰分析から SSPT で評価された嚥下反射の状態が AP に関連する予測因子であることが示された。オッズ比は 6.40（95%CI: 1.57-26.03）であり、予測精度は感度 73%、特異度 71%、陽性適中率 76%、陰性適中率 67%、正確度 72%、偽陰性率 27%、偽陽性率 29%であった。以上の結果より、長期療養病棟入院の嚥下障害患者において SSPT による嚥下反射の状態が AP の予測因子である可能性が示され、SSPT の新たな評価指標としての信頼性と有用性が示されたことから、本研究は歯科医学の発展に寄与するところが大きいと考えられる。よって、本論文は博士（口腔保健学）の学位授与に値すると判断した。